



気になるあいつ
わかぎゑふ

双葉社

救世主

今、芝居の脚本を書いている。だからめっちゃくちや生活範囲が狭い。書いてるものが時代劇で、源平ものだから、その資料とかに埋まってる、もう気分は王朝に染まってしまい、日常会話なのに「何事じゃ?」とか言う始末。ま、はつきり言っでこういう時は書くことに煮詰まってる状態だ。特に今回は書かないといけないが、焦点が多すぎて、どこから切り込むか悩みまくった。「どこから書こう?」が続き、原稿を20枚くらい書いてみては没にするという作業が5回くらいくり返された。

PCの中には脚本のタイトルが「時の男1」「時の男2」と順番に保

存され、5本目まで並んでいた。久しぶりに「なんか、もう書かれへん」と弱音を吐きそうな感じでもあった。8月に入って、さあ書くぞ！と意気込んだら、劇団のトラブルとか、誰かの芝居を見に行かないといけない義理とか、事務所の人出不足などに巻き込まれ「誰か私をひとりにして！」と叫びたくなるような毎日が続いて2週間ほどが過ぎていった。やっと今週、落ち着いて書こうとしているのだが：3分の2まで書いてタイムアウトになった。他の仕事をしないともう遅らせられない時期になってしまったのだ。

仕事だったら催促されるが、劇団の脚本なんて誰も催促してこない。でも誰もがもう書きあがるだろうと勝手に思い込んでる。内容の良し悪しなどは聞かれない。調べ物に協力してくれるメンバーも前はいたが、今はネットがその代わりになってるのでコミュニケーションもとらないで一人のままの仕事部屋で過ごす。「ほんまにこのまま書いてええんやろうか？」と自問自答する日々が続く、2時間寝ては書き、書いては

考えて飲み、飲んででは4時間寝る…なんて生活をしてると、いったい自分が何時にどこでなにをしているのかわからなくなってしまう。

ふっと気がつくと朝の6時にやっと一段落付いたからと思つて缶ビールをプシッと開けて飲んでる。すると、通りかかった母が「何時まで飲むつもりやの！」と怒ったりする。「いや、あんたは今が朝かもしれんけど、私は夜の延長や」と言い訳しないといけない。

演出してる時は体はしんどいが、動き回り、発散してるので開放的だ。だが、書きものは暗くて孤独だ。はやく現場に行くためにも書かないと行けないというジレンマの中でまたあがくことになる。

なーんてシリアスな事を書いているのが、今度の脚本は久しぶりのコメディだ。だからこそ胃が痛くなるような思いをしているのかもしれない。悲劇は書いてると悦に入ってくるが、喜劇は「あほちゃうか、わし」とか思い、落ち込む一方なのだ。

今のところ、私の外界とのコンタクトは「阪神タイガース」の試合だ

けである。阪神の試合の中継を見ながら食事をする。すると「ああ、夕方なんだな」と実感が湧き、社会性を一瞬でも取り戻すというわけである。おまけに阪神が勝つと何故か書くのに弾みがつく。典型的な阪神ファンみたいな生活を送ることになってしまっている。

ま、源平合戦もセリーグ優勝合戦も、熱い闘いに違いはないから、発売されやすいのだが、ともかく今年のタイガースが強くてよかった。これで優勝争いに関係なかったら、私の生活はもつとむちゃくちゃになっていたことだろう。この場を借りて、ありがとう阪神タイガースと一足先に言わせてほしい。

【著者略歴】

わかぎあふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より故中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーII」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。
